

令和2年度「学術変革領域研究（A）」新規採択研究領域  
に係る研究概要・審査結果の所見

領域番号	20A101	領域略称名	生涯学
研究領域名	生涯学の創出—超高齢社会における発達・加齢観の刷新		
領域代表者名 (所属等)	月浦 崇 (京都大学・人間・環境学研究科・教授)		

(応募領域の研究概要)

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセスとして明示することを目的とする。そして、人間に関する人文社会科学の多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析による認知心理学的研究、脳活動測定による生理心理学的研究、精神疾患や認知症に関する臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、フィールド調査を基にした文化人類学的研究、そしてそれらの基礎研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤と、その実現に必須の新しい生涯観を提供できると考えている。

(審査結果の所見)

本研究領域は、2007年に高齢化率が21%を超えて超高齢社会を迎えた我が国において、「高齢脳の可塑性」を切り口とし、心理学（認知、生理、臨床等）、社会学、教育学、文化人類学の研究者がチームを組み、強力な研究体制を構築しており、融合領域の創成と当該学問分野の先端的発展及び飛躍的な展開が十分期待できる。いわゆる生物心理社会モデル（biopsychosocial model）の考え方のとおり、脳イメージング法を基礎としつつ、知覚・記憶の認知過程、レジリエンス及びウェルビーイングなどの心理過程、高齢者の社会参加の条件分析など幅広い観点と方法論から取り組むものとなっている。さらに、政策学的な観点からの提言を行う体制も整えられ、成果の社会的還元も期待できる。

本研究領域では、領域代表者ほかの研究者は、これまでインパクトファクターの高い一流国際誌に多くの論文を発表しており、本研究においても国際的水準に照らして高い研究成果が期待できる。一方で、「生涯学」「発達・加齢観の刷新」の説明のインパクトがやや弱い。既にある老年学や生涯発達心理学をより総合的に考えるのが生涯学の方向性であるが、生涯学の新たな創出や発達・加齢観の刷新を生み出すモーメントなりエネルギーなりが何であるか、心理学、社会学、文化人類学あるいは教育学との協同作業の軸となるものが何かについて、現段階で十分明確な見通しが示されているとは必ずしも言えず、研究を遂行する中でこの諸点を深めていくことが望まれる。